様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年　6 月　5 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５２０３０３
研究課題名（和文）　フランス領ポリネシア及び周辺への讃美歌の普及とそれが近代歌謡形成に及ぼした影響
研究課題名（英文）　The diffusion of hymn practice and its influence on the composition of new songs in and around French Polynesia.

研究代表者
安田　寛(YASUDA HIROSHI)
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号　：10182338

研究成果の概要：
19 世紀の日韓の讃美歌曲はミクロネシアとポリネシアの中ではミクロネシアとハワイとに共通するものが多く、これに比べるとハワイを除くポリネシアの讃美歌曲との関係が比較的薄い。
讃美歌から近代歌謡が形成される筋道に関しては、タヒチに見られるように、讃美歌と土着の歌謡とが融合する場合があり、サモアに見られるように讃美歌曲を独自に作曲する場合がある。
日本を含めた太平洋全域における讃美歌の普及と捕鯨活動との密接な関係がある。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
19 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
20 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論
キーワード：近代歌謡史、讃美歌、ポリネシア、比較文化、文化変容、サモア、合唱、唱歌

１．研究開始当初の背景

本研究を位置づけると、日本の近代歌謡の一形式である唱歌は１８世紀及び１９世紀のキリスト教海外宣教の副産物である讃美歌の普及によるアジア・太平洋地域の歌謡文化の地滑り的西洋化の産物の一形態である、という仮説に基づいて、新たな研究領域を開拓する独創的研究である、となる。

ここに到る研究動向であるが、本研究の発端となったのは１９９０年代前半に、上海音楽院教授の羅傳開、北京中央音楽院教授の張前教授、韓国総合芸術大学教授の閔庚燦教授らによって行われた日本の唱歌の東アジアへの伝搬の研究であった。同時期に応募者は著作「唱歌と十字架」（１９９３年）によって日本の唱歌がキリスト教の讃美歌に深く影響されていることを明らかにした。以上２

つの研究動向によって讃美歌の普及と唱歌の普及は相互に関連しているという新しい視点が研究に導入された。

これを踏まえて応募者は、まず東アジアに限定して、「キリスト教布教に伴う讃美歌教育と近代東アジア歌謡文化の成立」（科学研究費　平成１３年度ー平成１４年度）によって中国、特に韓国の讃美歌集を網羅的に収集し、分析し、その近代歌謡への発展の筋道のアウトラインを解明した。

引き続き、平和中島財団国際学術共同研究助成（平成 15 年）による研究「音楽の土着化～アジア・太平洋地域近代音楽史とその合流～」を行った。これは、ハワイ大学教授ジェーン・ムーラン、オタゴ大学助教授ヘンリー・ジョンソン、パプア・ニューギニア学現代研究所主任研究員ドン・ナイル、韓国総合芸術大学教授閔庚燦と行った共同研究で、アジア・太平洋地域の讃美歌の普及の過程とそれぞれの地域での近代歌謡に与えた影響について恐らくはじめての研究であった。

上記の研究を補うものとして、日本の唱歌はアジア・太平洋の近代歌謡に深刻な影響を及ぼしたキリスト教讃美歌の深い影響を被っていることを、キリスト教に反対する立場、具体的な機関で言えば、唱歌の歌詞の主導権を保持した宮中の御歌所、神道の普及の中心機関であった皇典講究所に関わった人たちの立場から反照した研究を「反キリスト教と新伝統としての国楽の創出過程に関する総合的研究」（基盤研究(C)(1)、平成 16 年ー平成 18 年）を現在行っている。

これらの研究を通じて、韓国、中国、ハワイ及びミクロネシアの讃美歌集と関連文献資料を収集し、整理分析し、最初に述べた仮説がこの地域でも有効であることを実証した。つまり、日本の唱歌は１９世紀にアジア・太平洋に普及したキリスト教讃美歌の一変種であり、日本の唱歌の原曲となった讃美歌の多くが、当時のハワイ、ミクロネシアの讃美歌と共通していることを明らかにした。

本研究ではすでに行った東アジア、ミクロネシア及びハワイ諸島からさらにポリネシアの南東部、フランス領ポリネシアに広げる。その場合、この地域のキリスト教普及の中心地だったタヒチに焦点を当て、 クック、トンガ、サモア、さらにニュージーランドといった周辺の島々を含めて、讃美歌の普及の過程とその特徴、さらに讃美歌の普及によってタヒチとその周辺諸島の歌謡文化がどのような変容を被ったかを調査する

２．研究の目的

キリスト教讃美歌の普及によってフランス領ポリネシア及びその周辺地域にどのような新しい歌謡文化が形成されたかについて明らかにし、それとミクロネシア、ハワイ諸島、東アジアの場合、特に日本の唱歌と比較することによって、太平洋の各地域の異同を概観する。

３．研究の方法

収集対象地域は、フランス領ポリネシア、クック、トンガ、サモア、ニュージーランド。

当該地域の讃美歌に関する研究論文の収集。

当該地域の宣教師の記録（書簡、報告書、著作）の収集。

当該地域の讃美歌の歌唱を記録した録音の収集。

収集場所は、ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館、太平洋コレクション及びビショップ博物館アーカイヴ。

フィールドワークに関しては、音楽市場の現況、学校音楽教育の現況、教会音楽の現況について調査する。

海外の当該研究者と研究会を開き、情報交換を行う。

分析については、讃美歌集を出版年代順に整理し、収録数、出典、歌詞（外国語あるいは現地語）、音楽（西洋音楽あるいは伝統音楽）についてそれぞれ分析し、整理する。さらに、讃美歌を年代、歌詞の内容、曲出典について分析し、整理する。

分析の結果をデーターベース化する。

以上整理し、データベース化したものによって、讃美歌集及び讃美歌について、ミクロネシア、ハワイ、東アジアのそれらと比較し、讃美歌の普及がこれらの地域に及ぼした影響についての共通点と相違点を明らかにする。

４．研究成果

調査・収集に関しては、ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館（太平洋コレクション）及びシンクレア図書館で対象地域（フランス領ポリネシア、クック、トンガ、サモア、ニュージーランド）の讃美歌集、讃美歌に関する研究論文の収集、讃美歌の歌唱を記録した録音を収集した。

フィールドワークに関してはアメリカン・サモアで教会音楽の現況及び学校音楽教育の現況を調査。また現地のネイティブの音楽研究者クキ・ツイア・ソソポにインタビューを行った。

収集した資料の整理については収集した讃美歌集を電子ファイル（ＰＤＦ）化し、讃美歌集の目録と曲目（チューン・ネーム）のデータベースを作成した。

海外共同研究者と研究会及び学会等でのシンポジウムを行い、研究上の有益な意見交換を行い、貴重な情報を得た。

以上からの分析と考察は以下の通りである。

19 世紀の日韓の讃美歌曲はミクロネシアとポリネシアの中ではミクロネシアとハワイとに共通するものが多く、これに比べるとハワイを除くポリネシアの讃美歌曲との関係が比較的薄い。

その要点は以下の通りである。

日韓近代音楽の西洋化の過程の相互関係が、普通見られているように、日韓だけに限られるものではなく、実は、アジア太平洋の各地で進行した過程に密に関係している。

地域としては、韓国、日本、ハワイ、ミクロネシア、ポリネシアを取り出す。これらの地域間の讃美歌の異同を見るために次のような分析処理を行った。

１．まず日韓で共通する讃美歌を選びだす。

２．次に選び出した讃美歌が他のどの地域と共通するかを見る。

そうすると、

１）まず日韓だけに共通する讃美歌がある（ＫＪと表記）

２）他の一地域と共通する讃美歌がる（ハワイと共通するものはＫＪＨと表記。同じくＫＪＭ（ミクロネシアと共通）、ＫＪＰ（ポリネシアと共通）

３）他の２地域と共通する讃美歌がある（ＫＪＨＭ，ＫＪＨＰ，ＫＪＭＰ）

４）最後に全地域に共通する讃美歌がある（ＫＪＨＭＰ）

それぞれに占める割合は次のようになった。

ＫＪ	32%
ＫＪＭ	27%
ＫＪＨＭ	22%
ＫＪＨ	12%
ＫＪＭＰ	3%
ＫＪＨＭＰ	2%
ＫＪＨＰ	1%
ＫＪＰ	1%

この割合によって日韓に共通する讃美歌はミクロネシアとハワイと共通するものが多いことが分かった。これに比べるとポリネシアの讃美歌との関係が薄いことも分かった。

さらに日韓だけに共通する讃美が 32%で、他の地域と共通するものが 68%あり、ざっと日韓に共通する讃美歌全体の約 7 割の讃美歌が他の地域と共通するものであった。

比較するためのデータベースをさらに充実すること、データの精度を高めること、さらに他のいろいろな関係を見なければならない、という作業が残っているが、それらを差し引いても、讃美歌によって引き起こされた日韓近代音楽の西洋化の過程の相互関係が、アジア太平の各地で進行した過程に密に関係していたことが明らかになった。

讃美歌から近代歌謡が形成される筋道に関しては、タヒチの例に見られるように、讃美歌のような西洋歌謡と土着の歌謡との融合という筋道がある。

アメリカン・サモアのケーススタディ-で明らかになったように、讃美歌から近代歌謡が発生する過程において、讃美歌に関して独自な作曲活動が行われるか否かが重要な過程の１つである。日本でも例えば「琵琶湖就航の歌」にこうした例を見ることが出来る。

ミクロネシアのトラック諸島ではキリスト教の歌は最もよく歌われる歌で、毎週の礼拝の他にさまざまな機会に歌われる。トラック人自身が作曲した地方讃美歌は正式のトラック讃美歌集には含まれていないが、日曜日に決まって演奏される。その形式は、唱歌「故郷」の例に見られる讃美歌の影響から生まれた唱歌の形式特徴である小さな通作歌曲に通じるものがあり興味深い。

太平洋の讃美歌歌謡の典型であった無伴奏の４声部合唱はトラック諸島では過去スタイルとなりつつあり、教会音楽はグローヴァルなポピュラー音楽と結びついているといった、教会の歌そのものがポピュラー化している。

日本を含めた太平洋全域において讃美歌が普及することになった原因が 19 世紀に盛んであった捕鯨活動にあった、という新しい説を提起した。つまり捕鯨という経済活動とキリスト教宣教という宗教活動は不即不離の関係にあった。

その概要は以下の通りである。

１９世紀の太平洋のキリスト教伝道と当時のイギリスとアメリカの捕鯨活動とは密接に関係していた。捕鯨船は宣教師を運んだだけでなく、彼らの郵便船であり、生活に必要な物資を運ぶ船であった。ケープホーンを回った捕鯨船はチリの西海岸沿いに北上し赤道近くに到ると船首を西に向け太平洋の奥へと進む。ガラパゴスからギルバート諸島、エリス諸島まで赤道に沿ってまっすぐ伸びるマッコウクジラが多く集まる捕鯨場がオン・ザ・ラインと呼ばれる漁場である。オン・ザ・ラインは南と北に二つの支線を持っていて、南の支線はマルケサス、タヒチ、クック諸島、あるいはサモア、トンガを通ってニュージーランドに至る。北に延びる支線がジャパングラウンドと呼ばれた漁場である。

ここで注目すべきは、捕鯨航路はそのまま伝道航路であったことである。赤道に沿ったオン・ザ・ラインを境に南はイギリスの宣教団が北はアメリカの宣教団が管轄した。アメリカの宣教団が管轄したのは、ジャパン・グラウンドという捕鯨場に関係した地域であ

る。ジャパングラウンドとはハワイ、小笠原諸島、北海道を結んだ三角形の地域をいう。ジャパン・グラウンドに関係した地域、ハワイ、ミクロネシア、日本に宣教師を送ったのはアメリカの宣教団体であった。

讃美歌に関してこの三地域は共通曲が多いという点で密接な関係がある。日本の唱歌が影響を受けたのはまさにこの地域に流布した讃美歌である。一例を挙げるなら、小学唱歌集初編（１８８２年）に掲載された唱歌「蝶々」と同じ旋律を讃美歌では"Lightly row"と呼ぶ。この讃美歌がミクロネシアのクサイ島の讃美歌集に掲載された年は、１８６５年、１８８９年、１８９４年、１８９７年である。マーシャル列島では、１８６８年、１８８１年、１８９１年、１８９５年、１９１１年である。ちなみに韓国で唱歌「蝶」が唱歌集に載ったのは１９１０年である。

他の多くの例は割愛するが、幕末から明治にかけてハワイ、ミクロネシア、日本、韓国の子どもたちは讃美歌として唱歌としてこのように同じ旋律を歌っていた。１９世紀にハワイ、ミクロネシア、日本、そして韓国で共通のキリスト教歌謡文化圏が形成された遠因は、捕鯨漁場ジャパン・グラウンドに群がったアメリカの捕鯨船の活動にあったのである。

讃美歌から近代歌謡に発展する筋道に複数の筋道が明らかになった事と共に、この新しい説は、この地域の近代歌謡史における讃美歌の重要性を改めてクローズアップすると共に、アジア太平洋地域の近代歌謡研究に大きな刺激を与え、残された課題であるメラネシアの讃美歌との比較など、今後さらに展開が必要となろう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２件）
①安田寛「１９世紀と２０世紀初期の日本と韓国の讃美歌とオセアニアの讃美歌との関係」奈良教育大学紀要（人文・社会科学系）57巻、141-144頁、2008、査読有
②安田寛「『白鯨』と日本の唱歌」Aube―比較藝術学第4/5合併号、106-120頁、2009、査読無

〔学会発表〕（計　２件）
①安田寛、嶋津宣文、福本康之「音楽における異文化受容4-宗教の視点から-」日本音楽表現学会、2008年6月、昭和音楽大学
②安田寛、ジェーン・ムーラン、クキ・トゥイアソソポ、ブライアン・ディトリッヒ、伊野義博「共同企画 ラウンドテーブル 音楽教育における民族のアイデンティティの喪失と回復--パシフィック地域の事例比較を通して」日本音楽教育学会、2008年11月、国立音楽大学

〔図書〕（計　１件）
①安田寛『日本の唱歌と太平洋の讃美歌－唱歌誕生はなぜ奇跡だったのか－』、奈良教育大学ブックレット第2号、東山書房、京都、1-78頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕
http://near.nara-edu.ac.jp/handle/10105/733
http://www.nara-edu.ac.jp/ADMIN/LAI/PRESS/PRESS.html

６．研究組織
(1)研究代表者
安田　寛（YASUDA　HIROSHI）
奈良教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10182338

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし

(4)海外研究協力者
Dr. Jane Freeman Moulin
Professor of Ethnomusicology
Music Department
University of Hawaii

Kuki Motumotu Tuiasosopo
Music Instructor
Fine Arts Department, ASCC (American Samoa
Community College)

Brian Edward Diettrich
Music Instructor
College of Micronesia-FSM (Federated States of Micronesia), National Campus